

2009年4月

## 「コリージュ」42号 目次

巻頭言（1～2） 大学院改革に関する国際ワークショップ報告（3～4） 第36回研究員集会報告（4） 大学教授職（Changing Academic Profession [CAP]）に関する国際会議報告（4～6） 高等教育公開セミナー報告（6） 特別研究報告（6～7） 2008年度の公開研究会（7） センター往来（8） 新任者・離任者から一言（9～14） センター滞在記（15～16）

## 巻頭言



### ある大学史コレクターの話

天野 郁夫（東京大学名誉教授）

大学史の収集を始めたのは30代の中頃である。当時、勤務していた国立教育研究所が中心になって進めていた、『日本近代教育百年史』の編纂事業にかかわりを持ち、その中の旧制専門学校の部分の執筆を担当したのが、きっかけになった。

研究所の図書館は、教育関係の蔵書数でわが国有数の規模を誇っており、その豊富な蔵書は歴史研究者にとって、宝の山と言ってよい。もちろん原稿を書くのに必要な資料にはことかかない。高等教育の部分と一緒に担当した、寺崎昌男・佐藤秀夫・麻生誠などの先達に教えられ、導かれて、いま考えてみても何とも贅沢な歴史研究の時間を過ごさせていただいた。

基本的な文献だけでも自分でそろえなければと、古本屋をまわって少しずつ大学史関係の本も集め始めた。当時、国立国会図書館にいた喜多村和之さんと、思いがけないことで親しくなったのも幸いした。研究所にもない稀こう本に近い大学史を借り出して、コピーを取らせてもらった。コピー機がまだ希少で、コピー一枚の単価も高かった時代である。研究所の仕事でなかったら、個人ではとてもできないことだった。

ところが執筆に取り掛かる直前になって、潮木守一さんが声をかけてくださり、名古屋大学に移ることになった。名古屋大学教育学部は、戦争末期に急造された岡崎高等師範が前身である。面接がてらうかがって、図書室をのぞいてみると、大学史関係の本などほとんどない。青くなった。幸い赴任まで、半年の時間的な余裕がある。古本屋めぐりに精を出し、配偶者にいいわけしながら、乏しい給料の大半を本代に費やすことになり、こうして蔵書の基礎ができることになった。

それからあとは、古書店のカatalogで注文したり、上京した折に、神田の古本屋を回ったりして少しずつ買っていったが、担当していたのは比較教育学であり、歴史研究は余技だから、本腰入れて集めたわけではない。それでもだんだん数が殖え、書架に占めるスペースも大きくなっていった。

大学史の重要な特徴は分厚く、何巻にもわたるものが少なくないうえ、上質紙を使っているから重量も半端ではない点にある。しかも、何よりも史・資料として使

No. **42**

うのだから、買ってすぐに丹念に読むなどというものではない。何か論文や本を書く時でもなければ、出番はやってこない。ましてや歴史に関心はあっても、プロの歴史研究者ではない私には、宝の持ち腐れになりかねない。実際に、歴史的なものを書く機会など、たまさかにしかないのだから、死蔵に近い状態が長く続いた。

それでも、蔵書家の常として、自分の持っていない本があるとどうしても欲しくなる。いつ使うかわからない本でも、自分の棚に置いておかないと不安になる。悪いことに、わが国の大学も明治以来の歴史を重ね、百年を迎える大学が多くなった。当然、百年史を出そうということになる。また戦後の「新制大学」も半世紀を過ぎれば、五十年史を編纂しなければと考える。こうして大学史の点数はどんどん増えていく。やめればいいのだが、いったん収集を始めたなら途中でやめる勇気がなくなるのが、コレクター心理である。蔵書は、着実に増えていった。

さらに悪いことに、東京大学に移って神田の古本街が近くになり、また試験や学歴、選抜等の問題に歴史的な研究関心を持ちはじめた。教育社会学の研究者が関心を持つ歴史資料と言え、オーソドックスなものよりも、学校案内、受験案内、受験雑誌、自伝などの雑本の類ということになる。古本屋では用が足りず、週末に神田の古書会館で開かれる古書展に出入りして、ゴミに近い雑本の山の中から、自分にとっての宝物を掘り出さなくてはならない。古書展に行けば当然、大学史も並んでいるから、持っていないものがあれば買いたくなる。こうして大学史関連の本はさらに増えることになった。

問題は本の置き場所である。勤め先があるうちは、狭くても研究室のスペースがあるからいい。ところが、いつかは定年退職の時がやってくる。そうなれば、途端に深刻な問題に行き当たる。研究室に置いてある蔵書を、どうしたらいいのか。東京大学を退職した時も悩んだが、国立大学財務・経営センターをやめたときには、いよいよ決断しなければならなくなった。

結局、教育学関係の本の大半を知人のいる台湾の大学に引き取ってもらい、英語の文献は中国のアモイ大学に寄贈し、高等教育と大学史関係の本は残すことにした。それを運送業者の倉庫に預かってもらっている間に、家をリフォームしてバリアフリーにし、ついでに（というよりこちらのほうが、配偶者にはいいにくい本当の狙いだったのだが）子供が出ていって空いたスペースをつぶして第2の書庫に充て、床を補強してなんとか収納していまに至っている。

そうまでして大学史関係の本を残したのは、30代の頃から営々と多額(?)の資金を投じて、唯一系統的(?)に集めた大学史関連の本を利用しないまま、あの世に行くのが何とも心残りではなかったからである。死蔵してきた大学史たちに、なんとか陽の目を見せてやりたい。そして、定職がなくなったこれからなら、それが可能ではないか。

実際に、大学史のコレクションを役立てる時が、ようやく来たようである。日本の大学について、社会的な本を書いてみたいと考え、作業に取り掛かった。そのうち、成果の一部をお見せできるかもしれない。付け加えておけば、インターネットという便利なものができたおかげで、古書展に出かけなくても「日本の古本屋」で検索すれば、たちどころに、しかも安い値段で大学史を手に入れることができるようになった。蔵書はまだ増え続けている。

それにしても、最近の大学史の内容の充実ぶりには、目を見張るものがある。筆頭格は、もちろん『東京大学百年史』だが、資料的に整備され、時代状況にも目配りの良い大学史が増えている。頭から読んでいても面白い、個性的な大学史も少なくない。読んでいると思いがけない事実の記述に行き当たることも、しばしばである。寺崎さんや中野実さんたち、大学史研究者の努力がようやく実り始めたのである。私のようなアマチュア歴史研究者にとっては、何ともありがたいことで、たっぷりその恩恵にあずかっている。

大学史を何冊も並べて、同じ時期や同じ問題について読み比べていると、制度史や政策史だけでは見えない、わが国の大学の赤裸々な姿が立体的に浮かび上がってくる。暇な高齢者の楽しみにはうってつけなのだが、難点は記憶力の減退である。せっかく面白い事実に行き当たっても、すぐに記憶の彼方にさよならされてしまう。そんな時には、もっと若いころに、同じ作業をしておけばよかったと悔いるのだが、もちろんその頃には、そんな時間的な余裕はなかったのだから仕方がない。元が取れるほど、使いこなさなければと思うのだが、焦ってみてもどうにもならない。

というわけで、努力と資金をつぎ込んできたその大学史コレクションを、どこまで活用できるのやら。いずれにせよ、あの世まで持っていくわけにはいかない。早くしないと今度はまた、コレクションの処分をどうするのか、頭を悩まさなければならぬ時が、否応なくやってくる。いつまでたっても悟りの開けない坊主のような、様にならない日々を送っているというのが、大学史コレクターのこの頃である。

# 大学院改革に関する国際ワークショップ報告

山本 眞一

2008年10月16日～17日に、高等教育研究開発センターでは、大学院改革に関する国際ワークショップを広島大学キャンパスにおいて主催した。これは、その前年に教育再生会議の答申を受けて、政府が経済財政改革の基本方針2007（いわゆる「骨太の方針」）において、大学院改革に重点的に取り組む方針を示したことに端を発する。これを受けてセンターは、文部科学省から新規予算を得、2008年度から5か年計画で、わが国の大学・大学院を21世紀知識基盤社会にふさわしい形に改め、わが国発の知識を創造し積極的に世界に発信するとともに、地域や世界に貢献する高度な能力を備えた人材を養成しうる高等教育システムの構築に向けての必要な政策に関する研究を行うことになった。当面は、とくに大学院問題に重点を置いて研究活動を進めることとしたため、その重要なスタートとして、このワークショップを開催したのである。

ワークショップでは、大学院教育の制度や位置づけ、そして改革の方向などについて情報や意見を交換するため、米国、ドイツ、韓国から専門家を招き、またわが国の状況について小林信一筑波大学大学研究センター教授の講演を得て、会場に集まったおよそ70人の参加者とともに活発な討論がなされた。

米国ワシントン大学高等教育研究開発センター長のマレシ・ネラド博士は、米国における大学院とくに博士課程教育の仕組みの現状や課題について講演をした。米国大学院博士課程における教育訓練課程は、入学当初の1～2年間は必修科目のコースワークであり、コースワーク終了時に行われる試験（プレリナリー試験すなわち予備試験と呼ばれる）に合格しなければ先に進めない。選択科目が多くまた教育内容も各教員まかせのわが国の大学院と著しい相違があることを改めて確認させられた。入学から博士号授与に到る年数は5年ないし9年にかかることのであったので、この点はわが国と大きな相違はないこと、また理系については博士号取得後ポスト・ドクターとしてさらに訓練を積む必要があることなどを知ることができたことも収穫であった。ちなみに、米国では博士学位取得者が毎年約5万人あるのに対して、修士学位取得者はその10倍にあたる50万人近くもあり、その役割・機能はお互いに全く異なるものである。修士課程と博士前期課程がしばしば同列で論じられるわが国との相違は大きい。

ドイツ・カッセル大学高等教育研究センター長のバーバラ・ケーム教授は、ヨーロッパ諸国における大学院教育の現状と改革の方向について語った。周知のごとく、現在ヨーロッパ諸国においては、いわゆる「ボローニャ・プロセス」と呼ばれる教育システム改革が共通の目標として進行中であり、米国型の高等教育である学士・修士・博士の3段階の学位教育課程の構築に向けて努力が重ねられている。これはもともと大学院というシステムとは別の形の研究訓練によって博士人材を養成していた、ドイツを始め多くの国にとって革新的なことであり、戦後ドイツ型からアメリカ型に切り替えたわが国の経験に重ね合わせても、関心ある論点である。

ケーム教授の話で印象的であったことは、ヨーロッパでは博士（ドクター）といってもさまざまな形態があり一様ではないということで、その中には我々が普通に博士と想定している「研究型博士」（Research Doctorates）のほか、「課程型博士」（Taught Doctorates, 「論文博士」（Ph.D. by Published Work）, 「職業型博士」（Professional Doctorates）, 「新ルート博士」（New Route Doctorates, 留学生向け）などがあることを知った。

韓国高麗大学校高等教育政策研究センター長のシン・ヒョンスク教授は、最近の韓国高等教育政策とその方向性について講演を行い、戦後米国型高等教育システムを広く受け入れた韓国であるが、それにも関わらず韓国独自の文化・社会的背景に影響されており、さまざまな課題があるとして、たとえば大学院卒業者数と産業界等からの需要とのバランスの問題、大学院教育の質の確保、国際競争力の向上、学位取得に到る長期間の年数など、わが国とも共通性の高い政策課題を抱えていることを知った。

なお、2008年7月策定の教育振興基本計画においては、





大学院教育振興施策要綱（2006～2010）に基づき、世界的に卓越した教育研究拠点の重点的な形成や大学院におけるすぐれた組織的な教育の取組を支援するとともに、意欲と能力のある若手研究者等が活躍できる環境づくりを支援するとされているところであり、センターとしてもさらにこの研究に力を入れていきたいと考えているところである。

## 第36回研究員集会報告

村澤 昌崇

今年度の研究員集会は、『我が国大学院の現状と課題』と題し、10月17、18日の2日間開催された。

昨年の研究員集会は『知識基盤社会における高等教育システムの新たな展開』と題していたが、実質には知識生産の拠点となる大学院を念頭に置いたものであり、今回はその続編であった。今年度は、当センターが獲得した『特別教育研究経費』による戦略的研究プロジェクトのテーマが大学院であることから、昨年を目論見をより具体的に整理・発展させ、国内外の大学院の抱える問題を社会問題化し議論する点に焦点を置く会として位置づけた。

1日目のセッション1は、基調講演と題して竹内洋氏（関西大学）、原山優子氏（東北大学）にお願いした。竹内氏は氏の大学院経験を交えながら古き良き時代の大学院にまつわる四方山話を奔放に展開し、フロアを湧かせた。原山氏には、科学技術政策の観点から我が国大学院の課題と展望を述べていただいた。

2日目のセッション2は、大学院問題をより具体的に掘り下げるべく、四氏にご報告いただいた。まず前田早苗氏（千葉大学）には、文科省委託の大学基準協会による大学院調査に基づき、日本の大学院の教育研究活動と改革の動向を紹介いただいた。次に阿曾沼明裕氏（名古屋大学）には、アメリカの大学院レベルでの財政配分の実態を報告いただいた。続く二氏には、文・理それぞれの分野における大学院の現状報告をお願いした。まず相田美砂子氏（広島大学）には、ジェンダー的視点も絡めた物理学分野の大学院組織の現状と課題についての報告をいただいた。渡邊聡氏（広島大学）からは、本人も深く関わったアメリカの社会科学系大学院の実情について、特に学位取得プロセスを中心にお話いただいた。

午後からは、天野郁夫氏にコメンテーターとしてご登場いただき、大学院に関わる基本問題を端的に整理していただいた。この交通整理により、個々のセッション報告の位置づけがより鮮明になった。さらに「専門職大学院は、本来専門職養成の教育組織であるはずなのに、研究組織であるはずの研究科所属になっていることに違和感がある」という興味深い投げかけもあった。

最終的には、山本真一センター長により、我が国における大学院研究のよりいっそうの蓄積の必要性をフロアで共有し、終会となった。



## 大学教授職（Changing Academic Profession [CAP]）に関する国際会議報告

### CAP 国際会議「大学教授職の15年間の変容1992-2007 — 国際比較および実証的視点から —」に関するまとめ

黄 福涛

2009年1月13日～14日にかけて、広島大学高等教育研究開発センター、文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」（研究代表者：有本 章〔広島大学名

誉教授，現 比治山大学高等教育研究所長]）主催，比治山大学高等教育研究所共催により，「大学教授職の15年間の変容1992-2007－国際比較および実証的視点から－」を題目とする大学教授職に関する第4回目の国際会議を開催した。

この会議では，オーストラリア，ブラジル，ドイツ，日本，メキシコ，韓国，イギリスおよびアメリカからの八カ国の研究者，日本国内と海外一般参加者およそ100人が出席した。この八カ国はいずれもカーネギー教育振興財団が1992～1993年に実施した第一回の国際調査および2007年のCAP国際調査に参加した国であり，1992年のデータと2007年のそれとを比較しながら，世界及び各国における15年間の大学教授職の変化，特に「大学教授の個人的な特徴や大学教授職のキャリア」，「大学教授職の教育と研究活動」と「大学教授職の国際化」の三つに焦点を当てて報告した。

一日半の会議において，三人の基調講演者は特に国際比較的な視点から大学教授職のキャリアおよび大学教授職の研究活動に関する変化にしぼって報告した。その後，八カ国の代表者は10のカントリー・レポートを行った。そのうち，日本からの五人の研究者は三つのテーマについてそれぞれ三つの報告をした。14日の午後，会議の論文集の出版や今後のさらなる共同研究などについて打ち合わせも行った。

今回の会議においては，基本的には以下の成果が挙げられるであろう。

第一に，国際比較，実証的視点に基づいて世界および関係諸国における15年間の大学教授職に関して三つのテーマに焦点をあてて，国際と国レベルだけではなく，機関レベル，さらにグループレベルにおいても，この15年間の大学教授職に関する変化やそれらの変化の程度などの課題も取り上げた。

第二に，大学教授職の変化に関するいくつかのパターンをまとめることができたことである。例えば，教育と研究活動のバランスについて，少なくとも二つのパターンが存在していると指摘されている。具体的には，九十年代初めごろ以後，日本の場合は，政府が進めている政策のもとで，研究志向が強いと言われた日本の大学教授職は次第に教育活動を重視するようになった。それに対して，イギリスの場合は，大学教授職は教育と研究のバランスのとれた両立に努力したが，研究業績を中心とする大学評価が導入されたため，研究活動への関心が高まりつつあると報告された。

第三に，大学教授職の変化に関する分析枠組みや研究フレームワークが出来上がったことである。アメリカの経験に基づいた大学教授職の国際化に関する分析枠組みや，韓国の事例研究が取り上げられた専門分野別大学教授職の変化に関する分析モデルなどは，今後，大学教授職の変化について質的研究や国際的な研究に大いに役立つことが期待できる。

第四に，大学教授職の変化に関する共通点やチャレンジも解明されたことである。具体的には，以下のような点が挙げられるべきと考えられる。

- ・高学位，特に海外博士号を授与された大学教授職の数が増えつつある。
- ・大学教授市場の競争がますます厳しくなる中，特に若手研究者の就職は困難である。
- ・先進国であろうが，新興国であろうが，大学教授職に求められる義務や責任が多様化された結果，それらの勤務時間や仕事の量が増えつつある。
- ・過去15年間，大学教授が発表した論文や出版した書物は増加した。
- ・その一方で大学教授職の高齢化が進んでいる。特にオーストラリアや日本においては深刻な問題である。
- ・学問の自由の侵害の恐れがある。
- ・大学教授職において分割された学術活動と新しい分業が行われる可能性がある。

一方，今後，特に以下のような課題についてもっと厳密的，しかも質的な視点から検討するべきだと思われる。

- ・各国に用いられる「研究」や，「国際化」，「仕事への満足度」，「ストレス」などのキーワードの意味に関する比較的分析や研究。



- ・関係諸国において大学教授職の変化をもたらした共通の要因やチャレンジ。
- ・大学教授職の順調な変化を促す政府の役割。
- ・この変化しつつある世界の中に大学教授職が演じるべき役割、および
- ・われわれの研究成果がどのような政治的・法的影響を与え、そして各国の大学教授職の変化に積極的な効果を挙げられるのかに関する共同研究であること。

今回のカントリー・レポートや参加者の皆さんによる活発な意見交換を通じて、過去15年間の大学教授職の世界的な変化や個別国における変化の特徴についての理解や把握を深めることができたと考えられる。

## 高等教育公開セミナー報告

### 平成20年度高等教育公開セミナー「大学と社会」

主として大学教職員向けに例年開催している高等教育公開セミナーを、平成20年度は8月18日（月）～19日（火）にかけてセンター内で開催した。今回は「大学と社会」と題して、センター教員10名によって講義を行った。セミナーへの参加申込者は定員と同じ30名で、地元の中四国地方はもとより、北海道、関東、東海、近畿、九州から幅広い参加が得られた。

セミナーの内容は以下の通りである（各講義1時間）。

- 講義1 政府と大学～1990年代大学改革進展の背景（山本眞一）
- 講義2 大学と社会との関係－質的保証システムの構築を焦点に－（黄福涛）
- 講義3 大学と国家、大学と社会－市場化の中で（大場淳）
- 講義4 大学（システム）の機能と構造（島一則）
- 講義5 大学経営における相互参照・模倣：大学国際化戦略を事例として（村澤昌崇）
- 講義6 学生の多様化に対応した学習支援・生活支援（大膳司）
- 講義7 大学教育の成果と大学生の学習行動（小方直幸）
- 講義8 グローバル社会と専門職大学院（渡邊聡）
- 講義9 大学教育の多様性と革新（福留東土）
- 講義10 大学の近未来（北垣郁雄）

講義後のアンケート（匿名）では、概ね好意的な意見が多かったが、各講義の時間が短く、特に質疑応答の時間が足りないといった意見も少なからず見受けられた。その他の意見の中では、基礎に重点を置いてもらいたい、グループ討論を入れて欲しい、参考文献を紹介してはどうか、懇親会が良かったなどといった意見が目についた。

（文責：大場淳）

## 特別研究報告

### 大学院教育に関する委託調査研究の実施

山本 眞一

高等教育研究開発センターでは「大学・大学院教育に関する調査」と題する調査研究を、2008年7月から2009年2月にかけて三菱総合研究所と共同で実施した。この調査研究は、2006年策定の第三期科学技術基本計画のフォローアップとして、総合科学技術会議が2008年度に科学技術政策研究所に実施させた調査研究プロジェクト12本のうちのひとつである。科学技術政策研究所はこれをシンクタンク等に実施委託し、この案件は三菱総研が受注したものである。

総合科学技術会議の問題意識は、現在のわが国の科学技術の現状について、国際競争力が低下してい



ること、それはわが国における大学・大学院教育の質の低下と関係があること、さらに政府の投資とその成果が見えにくいこと、に集約される。このため、主要国の政策動向、イノベーションの経済分析、科学技術人材に関する調査などと並んで、センターが実施した「大学・大学院の教育に関する調査」は重要な調査研究事項の一つに位置付けられ、調査研究の実施と並行して、有識者や内閣府、文部科学省などからなる委員会が組織され、我々は三菱総研やこの委員会と緊密に連絡を取りながら調査研究を実施した。

センターが担当した調査研究は、主要国の総合研究大学における理工系大学院教育の実態について調査を行うことにより、わが国の理工系大学院教育の改善に向けた課題と改善の方向性を整理することを目的としたものである。このため、センター長である私を責任者、渡邊、島、福留の3准教授を補佐とし、さらに数人のセンター教員とともに研究体制を組織した。調査研究は、国内の主要大学の関係者から、優秀な大学院学生の獲得戦略・方針、教育や学生の質に関する問題意識、大学院改革の方向性についての意見を聴取し、さらに物理学、機械工学、バイオ工学に焦点を絞った教育体制や教育課程の調査を行うため、東大と広大および米国の2大学（メリーランド大学とカリフォルニア大学バークレー校）を訪問し、比較分析を行った。

調査研究の結果を踏まえ、博士課程進学の際の隘路の解消や多様な学生を確実に教育できる体系的な仕組みの導入などいくつかの提言項目が整理できたので、これらは三菱総研を通じて科学技術政策研究所に報告した。この調査研究の成果は、総合科学技術会議において現在実施中の第三期科学技術基本計画の充実に役立てられるほか、次期の科学技術基本計画の策定にも資するものと期待している。実施に当たったセンター教員および複雑な事務処理に携わった事務担当者に感謝申し上げる次第である。

## 2008年度の公開研究会

\* 肩書は当時のもの（敬称略）

	講 師	テ ー マ
第1回 (2008/5/30)	エレン・ハゼルコーン氏（ダブリン工科大学教授）	OECD 諸国における世界大学ランキングの影響
第2回 (6/6)	モルシディ・シラット氏（マレーシア科学大学国立高等教育研究所長・教授／広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員）	マレーシア高等教育の戦略計画の方向性について －政治的混乱期における大学の自治－
第3回 (6/11)	ユーゴ・オルタ氏（東北大学・日本学術振興会外国人特別研究員）	アカデミック・インブリーディング －その全貌と背景を探る－
第4回 (7/18)	北川 文美氏（ルンド大学 Centre for Innovation, Research and Competence in the Learning Economy (CIRCLE) 教員 (Assistant professor)・研究員 (Research fellow)	北欧（スウェーデン、フィンランド、ノルウェー）におけるイノベーション政策の「地域性」と産学連携プログラムの比較（work in progress）
第5回 (7/28)	モルシディ・シラット氏（マレーシア科学大学国立高等教育研究所長・教授／広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員）	変化する政府と大学との関係 －日本とマレーシアとの比較を中心に－
第6回 (2009/1/23)	劉 念才氏（中国上海交通大学高等教育研究院院長・教授／広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員）	世界の大学ランキングとアジア大学のパフォーマンス
第7回 (2/20)	劉 念才氏（中国上海交通大学高等教育研究院院長・教授／広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員）	世界一流大学の育成に関する比較的研究

## センター往来 [2008年4月～2009年3月]

\*所属は当時のもの(敬称略)

### <2008年>

- 4月 Suh, Chung Wha; Yang, Seungshil; Kim, Hyeon-Jin; Jeon, Hyun Kyung (弘益大学), 山本誠司(三菱総合研究所), 田中正弘(島根大学), 杉本和弘(大学評価・学位授与機構), 渡邊あや(熊本大学)
- 5月 Morshidi Sirat (マレーシア科学大学), 有本章(比治山大学), 江原武一(立命館大学), 西本裕輝(琉球大学), 吉永契一郎(東京農工大), 山野井敦徳(くらしき作陽大学), 南部広孝(京都大学), 加野芳正(香川大学), 長谷川祐介(比治山大学), 天野智水(琉球大学), 木本尚美(県立広島大学), 浦田広朗(名城大学), 石塚公康(読売新聞), Ellen Hazelkorn(ダブリン工科大学)
- 6月 Hugo Horta (東北大学)
- 7月 岩崎久美子(国立教育政策研究所), 角南篤(政策研究大学院大学), 濱中淳子(大学入試センター), 小林信一(筑波大学), 丸山文裕(国立大学財務・経営センター), 原山優子(東北大学), 上山信一(慶応義塾大学), 北川文美(ルンド大学), 高木直二(早稲田大学)
- 8月 Machi F. Dilworth (米国 NSF 東京事務所), 阿曾沼明裕(名古屋大学), 楊武勳(台湾国立暨南国際大学)
- 9月 なし
- 10月 **大学院改革に関する国際ワークショップ及び第36回研究員集会招聘者** [Maresi Nerad (ワシントン大学), 小林信一(筑波大学), Barbara M. Kehm (カッセル大学), シン・ヒョンスク(高麗大学), 竹内洋(関西大学), 原山優子(東北大学), 前田早苗(千葉大学), 阿曾沼明裕(名古屋大学), 加藤毅(筑波大学), 天野郁夫(東京大学名誉教授), 館昭(桜美林大学), 相田美砂子(広島大学)]
- 11月 なし
- 12月 劉念才(上海交通大学), 西村伸也(新潟大学), 白柳康夫(横浜市立大学), 村田直樹(日本学術振興会), 夏目達也(名古屋大学), 潮木守一(桜美林大学)

### <2009年>

- 1月 **CAP 国際会議招聘者** [William Cummings (ジョージワシントン大学), Elizabeth Balbachevsky (サンパウロ大学), Hamish Coates (オーストラリア教育研究所), Leo Goedegebuure (ニューイングランド大学), Martin Finkelstein, Elaine M. Walker (シートンホール大学), Ulrich Teichler; Katharina Jacob; Florian Loewenstein (カッセル大学), Manuel Gil-Antón (メトロポリタン自治大学), José L. Arcos-Vega; Victor M. Alcantar (バハカリフォルニア自治大学), Jorge G. Martinez-Stack (メキシコ国立自治大学), William Locke (オープンユニバーシティ), Keith Morgan (ランカスター大学名誉教授), Jung Cheol Shin (ソウル国立大学), 高橋超・有本章・長谷川祐介(比治山大学), 江原武一(立命館大学), 山野井敦徳(くらしき作陽大学) 山田礼子(同志社大学)]
- 2月 M.F. Fave-Bonnet (パリ第10大学), 吉川裕美子(大学評価・学位授与機構), 馬越徹(桜美林大学), **4大学連携 SD 研修** [高木康・守屋明俊・丸地伸・中山道広・間部亮仁・林好彦(昭和大学), 河村稔明・村澤博臣(東京慈恵会医科大学), 橋本あゆみ(東邦大学)]
- 3月 深野政之(大学コンソーシアム京都)



## 新任者・離任者から一言

### 2009年度客員研究員



上原 秀一(うへはら しゅういち)  
宇都宮大学教育学部准教授

このたび、貴センターの客員研究員を仰せつかりました。誠に光栄に存じます。私は、文部科学省調査企画課において、フランスを中心とする諸外国の教育事情の調査の仕事に携わって参りました。

フランスの高等教育制度には、グランドゼコールをはじめとする大学以外の多様な高等教育機関の存在など、我が国と比べてとてもユニークな特色が多くあります。諸外国と我が国との高等教育政策の課題の共通点と相違点を探る作業は、自分にとって非常に重要なものと考えております。1年前から宇都宮大学教育学部の教職にあり、大学の現場から今後の日本の高等教育について考える機会が増えつつあります。任期中の皆様との交流を楽しみに致しております。



小山内 優(おさない まさる)  
国際教養大学副学長兼事務局長

秋田にある国際教養大学という、開学5年を経たばかりの公立大学で副学長兼事務局長として働いております。公立大学法人の第一号であったほか、徹底した少人数授業、授業は全て英語、世界各地の大学との双方向交流(全学生に交流先大学へ1年間の留学の義務付け、交流先大学からの留学生受入れ、授業料は相互不徴収、留学先で取得した単位は個別に認定)、完全 Semester 制及び9月入学・8月卒業の導入、図書館の24時間開館、全教職員との任期付契約及び教職員評価の給与への反映、教員へのテニュア制導入など、多くの新機軸を打ち出しており、他の日本の大学では得難い経験を積んでおります。関係者のお役に立つことができれば幸いと存じます。



神原 信幸(かんばら のぶゆき)  
新潟大学全学教育機構特任准教授

この度、客員研究員として広島大学高等教育研究開発センターと関わることをご縁を頂き、厚く御礼申し上げます。普段は新潟大学の全学教育機構という所で、大学教育改革と教育評価に関する活動に携わっております。大学院生時代は恩師 William K. Cummings 先生の元で、社会発展の切り口から教育制度分析について基礎教育と高等教育に焦点をあてて研鑽してまいりました。また、高等教育の D. Bruce Johnstone 先生、比較政治経済学の Claude E. Welch 先生らの薫陶を受けました。是非とも、この貴重な機会を活かして、自己研鑽を図るとともにセンターの活動に貢献できるように努力してまいりたいと存じます。



中山 実(なかやま むのる)  
東京工業大学教育工学開発センター准教授

東工大の教育システムのシンクタンクを目指す教育工学開発センターの一員にとって、高等教育研究の拠点である RIHE に客員研究員として加わらせていただくことは、非常に意義深い経験になると期待しております。

私が所属する日本教育工学会でも、学会として大学教員を対象とした研修会を開催するなど、教育工学の研究分野としても高等教育の問題への取り組みが始まっています。また、これは高等教育に関する問題が研究分野を越えた大きな課題になっていることを示しています。この機会を活かし、私なりに取り組めるテーマを見つけたいと考えております。RIHE 関係者はじめ高等教育研究者の皆様、種々のご指導をいただけますようお願い致します。



濱中 義隆 (はまなか よしたか)  
独立行政法人大学評価・学位授与機構  
学位審査研究部准教授

このたびは伝統ある貴センターの客員研究員を仰せつかり、たいへん光栄に存じます。

私はこれまで、新規学卒者の就職とその後の社会的地位達成、私立大学の財務や経営、近年では、学位授与機構に所属していることもあり、高等教育システムの多様化・弾力化と学位制度の問題など、高等教育に関する様々なジャンルに関して、主として計量的な研究をしてまいりました。貴センターには日本の高等教育研究をリードする先生方とともに、私にとって旧知の同世代の研究者も多数おられます。皆さまとの交流を通じてさらに見識を深められればと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。



松塚 ゆかり (まつづか ゆかり)  
一橋大学大学教育研究開発センター准教授

このたび高等教育研究を代表する貴センターの客員研究員を仰せつかり光栄に存じます。

2006年まで米国コロンビア大学教育経済学研究所に勤務の後、2006年4月より一橋大学 大学教育研究開発センターに赴任し、教育・学習効果の検証、学修パスウェイの分析、単位互換の経済学、教育資金流動化の効果などについて研究して参りました。これまでの3年間は米国での経験を生かしつつ学内の Institutional Research の機能構築に多くの時間を費やしてきましたが、今後はより視野を広め、多角的な観点から日本の高等教育全体に資する、より応用性の高い研究アプローチや分析手法を提案することで、貴センターに貢献できればと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。



吉永 契一郎 (よしなが けいいちろう)  
東京農工大学大学教育センター准教授

この度は、客員研究員にいただきありがとうございます。

私と廣大センターとの関係は、10年前に新潟大学に赴任し

た時に始まります。留学から戻った時点では、ほとんどゼロからのスタートでしたが、これまで、有本章先生より、センター等協議会、各種研究会、科研にお誘いいただき感謝しています。多くのセンター教員の方々と同じように、私も「雑務」に追われる毎日ですが、時折、アカデミック・国際的な視点から日常を振り返る機会を与えてくれる廣大センターは、心のオアシスとでも言うべき場所です。微力ながら、何かお役に立てればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

### 2009年度学内研究員



石田 三樹 (いしだ みき)  
大学院社会科学研究所教授

このたび、学内研究員を仰せつかりました。専門は国際金融論です。2002年度より WebCT を用いた授業実践を継続中で、

今年で8年目を迎えます。この間、対面授業を補完するものとして WebCT を導入することで、どのようにすれば教育効果を改善することができるか、について種々検討を重ねてまいりました。成果は着実に達成されているとの自負がある一方で、専門外ゆえの不安がございます。この機会に、皆様から様々な事柄についてご教示いただきたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。



奥居 正樹 (おくい まさき)  
大学院社会科学研究所准教授

私の専門は経営情報システム論です。これまで高等教育機関や農業法人といった非営利組織を対象として、事業改善のため

の経営戦略の可視化と業績評価の導入・運用について研究を進めてきました。国立大学は法人化されて今年で6年目となり、各大学は独自の大学評価システムと評価を行う組織体制を構築しています。その結果、多くの大学が外部への説明責任を果たしているとの成果を自認する一方、現場の評価担当者は評価結果のフィードバックが機能しないことや、評価疲れという課題に直面しています。このように、評価による大学マネジメントという

観点ではまだまだ未成熟のため、研究の余地が多く残されています。そこで、これを機会に皆様から多くの刺激を受けたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。



椿 康和(つばき やすかず)  
大学院社会科学部教授

国立大学法人制度が目指していた自主・自立の理念はどこまで実現され、それを支える運営システムは機能しているのか。

その中で、(1) 大学トップと現場の教職員との間に立つ部局長などの中間層の役割はどのように変わり、彼らが機能を果たすにはどのようなサポートが効果的か、(2) 職員と教員の実現可能で機能しうる協働モデルとは、(3) 大学マネジメントを支える情報システムのあり方、など、大学運営を離れた後も、種々の問題が頭の中を渦巻いていますが、なかなかリサーチ・クエスチョンに煮詰まらないもどかしさを感じていました。このたび学内研究員という機会を与えていただきましたので、皆様のご指導の下、少しでも前進したいと思います。



中村 純(なかむら あつし)  
情報メディア教育研究センター教授

日本でまだ計算機が特別なもので、神殿のような計算センターに置かれて利用者はマニュアルを解読して使わせていただくものと思われていた時代にイタリアの研究所に留学しました。そこで、計算機は仕事に気楽に利用する道具と皆が当たり前だと思っていて、また初めて使う利用者にも分かりやすく楽しい教材と支援体制が整っていることに感激したのが情報教育と教育の情報化に関わる原点になりました。しかし、学問としての教育はなかなか手強いフィールドだと思い知らされています。このたび、高教研の学内研究員にさせていただき、専門家の皆さまから、現場で役に立ちかつ学問的な土台のしっかりした取り組みについてご指導いただきたいと思っております。



圓山 裕(まるやま ひろし)  
大学院理学研究科教授

嘗て物理帝国主義という言葉がありました。物理学が理工系の全ての分野の基本となる学問であることを象徴的に表わしたものです。人口が減少し始めた今日、「知識離れ」「科学離れ」が蔓延する中で、理学に対する社会の見方には隔世の感があります。パラダイム・シフトと共に、教育の視点も基礎学力と学習意欲の間で揺らいでいるのかも知れません。昨年、文科省科学技術政策研究所の委託を受けた三菱総研による物理分野の大学院教育に関するインタビューを受けました。科学技術立国を標榜する我が国の高等教育において、科学と技術を継承し発展させる人材の育成は喫緊の課題です。高教研の活動を通して理学系教育の方法論を学びたく思っています。宜しくお願い致します。



丸山 恭司(まるやま やすし)  
大学院教育学研究科准教授

専門は教育の哲学・倫理学です。「ウイトゲンシュタイン他者論の教育学的意義」を中心テーマとして参りました。高等教育関連領域では、大学の倫理や専門職倫理教育の研究を進めています。

現在、大学院教育の開発的実践的研究に携わっています。将来大学教員になる博士課程後期の学生に、研究能力に加えて、授業力や事業企画力をいかにつけさせるか。学部教育の質的保証の一部として大学教員の授業力が問われる昨今、大学教員の養成的側面を併せもつ大学院にもまた教育改善が求められ始めています。その模索としてPreparing Future Faculty Programの教育学版を試案試行しております。

これから二年間学内研究員としてお世話になりながら、高等教育の倫理や大学院教育の在り方について考察を深めたく存じます。





**向井 一夫 (むかい かずお)**  
技術センター技術統括

技術センターは、全学的観点から人材の有効活用を図るとともに、教育・研究を支える技術支援を計画的・効率的・効果的に実行することを目的に設立されました。平成16年以降、運用システムの整備、組織運営に携わっていますが、それらに必要なマネジメント力の向上を図るために様々な研究会・研修会に参加して来ました。その一つである大学行政管理学会において山本眞一先生との出会いがあり、ご指導を仰ぐうちに学内研究員のお話をいただきました。技術職員としては初めての研究員となりますが、大学のために、技術センターが組織として役割を果たすには何をすべきかを考える良い機会と捉えております。どうぞよろしく申し上げます。

**2008年度教員**



**秦 由美子 (はだ ゆみこ)**  
高等教育研究開発センター准教授

2008年7月に着任致しました秦由美子です。既に8か月が過ぎましたが、まだ、生活のリズムがつかめず多々失敗しております。しかし、その度に高等教育研究開発センターの教職員や院生さん、皆さんが叱咤激励と共に親切にフォローして下さいますので、日々感謝で過ごしております。

現在は家とセンターとの往復だけの毎日ですが、1年経ちましたらもう少し活動範囲を広げたい、というのが現在の希望です。広島には安原義仁先生を始め、素晴らしいイギリス研究者の方々が居られますので、できればここで、文学、経済学、工学あらゆる分野の方々の参加での「イギリス研究会」を持てれば、と思っております。ご関心がお在りの方は、是非秦までご連絡下さい。お待ちしております。

**2008年度研究員**



**安部 保海 (あべ やすみ)**  
平成20年8月より、研究員としてセンターでお世話になっております。センターに来る以前は、物理学の研究所で素粒子物理学の研究に携わっていました。センターに着任した当初は、分野も環境も一変し、新鮮を感じる一方で、不安を感じるころもありましたが、センターの皆様のサポートのお陰で、2008年度を無事過ごすことができました。しかし、まだまだ不慣れなことも多く、高等教育についても、これからますます勉強しながらやっていかななくてはならないと感じておりますので、今後ともご教示のほどよろしく願いいたします。

センターに着任した当初は、分野も環境も一変し、新鮮を感じる一方で、不安を感じるころもありましたが、センターの皆様のサポートのお陰で、2008年度を無事過ごすことができました。しかし、まだまだ不慣れなことも多く、高等教育についても、これからますます勉強しながらやっていかななくてはならないと感じておりますので、今後ともご教示のほどよろしく願いいたします。



**李 敏 (り びん)**  
2008年6月14日より、研究員として勤務させていただくことになりました。これまではお茶の水女子大学教育社会学研究室に所属していたのですが、主として教育機会、大卒者労働市場などの問題を中心に研究してまいりました。また、2002年の来日以前3年間、上海の同済大学日本語学部で教鞭を執っていました。

来日の7年間で、語学教師から研究者という転身を果たしたというなら、高等教育研究のメッカとも言われるここ広島大学高等教育研究開発センターでは、もっと視野を広げて、より広く、より深く研究を研鑽と精進するように努力をいたします。皆様のご支援をよろしく願い申し上げます。

来日の7年間で、語学教師から研究者という転身を果たしたというなら、高等教育研究のメッカとも言われるここ広島大学高等教育研究開発センターでは、もっと視野を広げて、より広く、より深く研究を研鑽と精進するように努力をいたします。皆様のご支援をよろしく願い申し上げます。

**2008年度離任者**



**Professor Morshidi Sirat**  
外国人研究員 (2008年5-7月)  
RIHE: A Window to Japan

I was a visiting professor at RIHE for three months and my primary objective of taking this visiting

position was to develop a new research focus in comparative international higher education (between Japan and Malaysia). RIHE was just the right place in order to crystallise my initial ideas on this project. The people, the resources and the environment were just perfect for such an undertaking.

I left Hiroshima at the end of July 2008 and reported for work soon after that. My first week back at work, I was already receiving emails from scholars and researchers in Japan. What amazed me is that since then I have been hosting several scholars and researchers from all over Japan, even from universities that I have not been in contact with when I was at RIHE. I was touched that RIHE provided me a great opportunity and a window to Japan. But more importantly, I became the conduit and a host to Japanese scholars and researchers studying Malaysian higher education system and institutions. The short period at RIHE has enabled me to develop both academic and social networking, which is very important in the life of a researcher.



李 東林 (り とうりん)

研究支援員

2008年9月1日付けで、中国深圳大学師範学院教育系に准教授として赴任しました。センターには4年あまり、特別研究員や研究支援員としてお世話になりました。在職中はセンターの先生方や事務職員の方から多くのことを学びました。センターでの経験は、新しい職場で活かしていきたいと思います。コリーグの皆様には今後とも一層のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## 修了生



原田 健太郎 (はらだ けんたろう)  
博士課程前期修了 (2008年9月)

入学から修了まで、充実した時間を過ごして参りました。ひとえに、先生方を中心とした関係者の皆様のおかげであったと

考えております。

高等教育という分野に新たに足を踏み込んだことで、学ぶことは多かったと考えております。加えて、入学した年には21世紀COEを肌で触れることができました。また、国際会議や国際セミナー、研究員集会、公開研究会等の高等教育研究の最前線に参加できました。これらの体験で得たことは数多かったと考えております。

今後も、これまでの課題を深めつつ、広島大学高等教育研究開発センターという優れた環境を生かして、自身の研究活動を深めていきたいと考えております。



小貫 有紀子 (おぬき ゆきこ)  
博士課程後期修了 (2009年3月)

修士から博士まで6年間と長い間、センターにてお世話になりました。恵まれた研究環境下で伸び伸びと研究を進めさせて

頂いた事を心から感謝しております。特に最後の一年間は沢山の友人や先生、スタッフの方々に公私ともに支えていただきました。入学早々、自転車で転んで大怪我をして血だらけでセンターに辿り着いたこと、ぎっくり腰で倒れて毎日のように皆に食事を運んでもらったこと、ストレスで太って先生方を本気で心配させたことなど、泣いたり笑ったり忙しい6年間でした。何はともあれ、元気な姿で修了式を迎えられたことを何よりも嬉しく思います。新天地では少しは大人らしい新しい私を見せられるよう、頑張ります。



野地 知子 (のじ のりこ)  
博士課程前期修了 (2009年 3月)

今、振り返るといろんな場面が思い出される。入学当初、ただ夢中で高等教育の現状や課題を学んでいた頃。研究テーマを模索し、右往左往し、堂々巡りをしていた頃。自分は何を知りたいのかを、素直に心に尋ねた頃。テーマを決め、研究に集中した頃。振り返れば、自分の人生がそこに見えるような気がする。高等教育と並行して、人生の必須科目を学んでいたような気がする不思議な時期でした。4月からは大学職員として、これらの成果を職場に活かしていきたいと思います。高等教育研究開発センターの先生方、職員の皆様、院生の方々には大変お世話になりました。ありがとうございます。今後ともよろしく願いいたします。

## 新 入 生



井上 雅晴 (いのうえ まさはる)  
博士課程前期入学 (2008年 4月)

私は、広島大学職員を対象に平成20年度より導入された大学院修学研修制度により、広島大学大学院教育学研究科高等教育開発専攻で学ばせていただく機会を得ました。この1年間は、センターの先生方、職員の方々、研究室の皆さんなど、様々な方々のご指導、ご協力のおかげでとても有意義なものとなりました。残り1年間も大切に過ごしていきたいと思います。どうぞよろしく願い致します。



田中 佑典 (たなか ゆうすけ)  
博士課程前期入学 (2008年 4月)

思えばウン年前、東京のとある大学院に通っていた私は体調を崩してしまってそこを中退、都落ち同然にして郷里に落ち着いたというホロ苦い記憶があります。その後郷里の学習塾に就職させて頂き、会社には非常にお世話になってきましたが、一度は断念した学問の道をどうしても諦めきれず、会社勤めの傍ら昨年よりこのセンターの一員として学ばせて頂くことに

なりました。研究テーマは「大学における人文科学教育」です。かつて在籍していたのが人文系大学院だったということ、そして現在私自身が「塾屋さん」として人文系教科を中心に教えているという経験も踏まえながら、自身が愛してやまない人文科学の発展に寄与することができれば、という多少おこがましい望みを持ちながら日々の研究に勤しんでいる次第です。



橋本 規孝 (はしもと のりたか)  
博士課程前期入学 (2008年 4月)

大学職員として勤めながら高等教育開発専攻で学び研究するという貴重な機会を得てから、はや一年が経とうとしています。センターの教員の方々、院生の先輩や同期、職場の同僚などさまざまな方々から、受講形態をはじめとして、多岐にわたるご協力をいただきながら少しずつ歩んでくることができた一年でした。そのように恵まれた環境のなか、それまで意識することがあまりなかった「研究」をより身近に感じ、実務や事例報告と研究との違いを自分のなかで咀嚼する必要性を実感しています。これからも、実務現場に足をおきながら、一人の大学院生として、微力ながらも意義ある研究成果を目指して努めます。



藤原 久美子 (ふじわら くみこ)  
博士課程後期入学 (2008年 4月)

「仕事と学業の両立」、これは私を含めた社会人大学院生にとって最もありきたり、かつ最大の課題であると思いますが、「両立」ということは物理的に何かを「削る」ことを意味するものと痛感した一年でした。「削った」ものが贅肉であれば諸手を挙げて喜べるのですが!

ともかく先生・TA・先輩・同輩・上司・同僚・家族…様々な人に支えられた一年はあっという間に過ぎ去りました。今後は「職場(大学)=研究テーマ(高等教育機関)の場」であることをポジティブに捉え、「削った」ものを研究成果で補うべく蝸牛の歩みではありますが邁進していきたいと思ひます。

※景山愛子さん、立石信治さんも、2008年4月、博士課程後期に入学されました。



## センター滞在記



### RIHE: An Extraordinary Place to Enjoy Academic Life

**Professor Nian Cai Liu**

(Shanghai Jiao Tong University, China)

It's about time for me to go back to Shanghai. The three-month stay at RIHE was an extraordinary pleasure. It's becoming a turning point in my life, turning toward a reasonably relaxed style and turning back to the academic life with more time on scholarly research which I have enjoyed ever since I was a doctoral student at Queen's University in Canada twenty years ago.

For the past three months, I worked 10-11 hours a day and six days a week. This may be too much for many people. However, it was reasonably relaxed for a workaholic like me, who used to work 15-16 hours a day and 7 days a week. More importantly, I was able to enjoy a quiet academic life in this nice town of Saijo since there were no meetings and phone calls. In addition to dealing with the routine emails for a couple of hours everyday, I was able to spend quite some time on reading literature and doing research. On average, I read more than one book every week, which was not the case for the past 10 years. In addition to books, I have been reading dozens, maybe hundreds, of articles and reports, which is essential for any serious scholarly research.

During the past three months, I have had the convenience of accessing the RIHE Library at any time, since my office is located inside the library. As a matter of fact, RIHE is in the same building as the central library of the University. The RIHE Library is definitely one of the best higher education libraries in the world, with about the same number of higher education collections in foreign languages as in Japanese. Sitting in such a nice academic environment, it is impossible for any scholar not to be creative. I was able to read over all the literatures I had before and those I could find here, including topics on world-class universities, research universities, university ranking, academic profession, doctoral education, departmental chairs and deans, etc.

I would like to express my great appreciation to Prof. Shinichi Yamamoto and Prof. Futao Huang, who have invited me and made all this possible. Thanks to the RIHE Administrative Unit and the library staff for their efficiency. I must give special gratitude to Mrs. Masayo Daikoku, who has helped me on renting the apartment, going through all the formalities and administrative procedures, setting up the bank account, remitting money, printing handouts, and so on. It's hard for me to imagine how I could survive without Mrs. Daikoku's timely and all-round help. I also would like to sincerely thank Dr. Min Li, who provided handy help on getting the language tutor and on some basics such as shopping.

If I had stayed for a couple of months more, I would have spent more time with RIHE colleagues, to learn more about Japanese language, to travel through the beautiful landscape of this country, and to enjoy the hot springs in the snow. I hope there will be another chance for me to stay at this extraordinary place in the future.

All the best wishes for a world-class institute like RIHE!

(劉先生は平成20年12月～21年2月まで広島大学外国人研究員としてセンターに滞在されました。)



## Drew M. Foster

フルブライト・フェロー

広島大学高等教育研究開発センター外国人研究生（2008年10月入学）

間もなく自分の一年間の滞在の折り返し地点を迎えます。この機会に過去を振り返り、また将来を見通してみたいと思います。アメリカのコロラド州から RIHE までの旅は実は大学の1年生の時に始まりました。こづかいが欲しい19歳の私は気まぐれに大学の入学生センターでキャンパスツアーガイドのアルバイトを始めました。それは3年生の秋学期まで楽しく続き、その中で少し日本語を勉強し、その後5ヶ月ほど早稲田大学に留学しました。東京に住みながら自分が日本を大好きであることを悟った私は「日本に戻ります」と誓いました。帰国後、夏休みにコロラドカレッジの入学生センターで常勤のフェローシップに参加して、スタッフとして入学希望者と面接したり、運営委員会に加わっていました。

アメリカの大学の入学生センターは大学の広告を出すことなどに責任があります。そのためにアメリカの競争環境に関して「同じレベルの大学と比べればこの学校はどんな独自性をもっていますか」「大学の特質を表す一番良い方法は何ですか」つまり「この大学のアイデンティティは何ですか」という問題についてよく討論します。そういう問題が気になった私は社会学部の卒業論文で調査しようと、学問的観点から大学のアイデンティティの形成について勉強し始めました。留学時代の経験から自然にこのトピックを日本の大学に適用することを考え、卒論のアドバイザーのすすめで、日本の大学のアイデンティティを研究するためにフルブライト奨学金のフルブライト・フェローシップに申し込みました。

フルブライトのフェローシップについては全分野の大学新卒者が対象で、東京地区以外の大学に配属され学位を取得しない研究、日本語の学習、日本文化と社会の広い体験を目的とします。喜ばしいことに、私は去年の4月奨学金を獲得することが知らされました。6月に日米教育委員会は私に広島大学の RIHE に配属することを通知すると、私は早速センターの活動などを調べました。評判がよく、リソースの多いセンターに期待が高まりました。

それではフルブライト奨学金の言語交流精神に則り、この記事は英語でしめくります。

From my first day at RIHE last September, I have been moved by the constant support I have received. The staff, faculty, and particularly the students have been untiring in their efforts to make my time here trouble-free and academically fruitful. With the Center's support, I have been able to pursue my research on Japanese university identity—a concept that I believe has enormous sociological significance and that can tell us much about Japanese society in general. What is more, though, is that the Center's efforts to make my transition to living in Japan smooth have enabled me to really focus on what I'm here to do: learn more about Japan, about universities, and about myself. The Fulbright Fellowship is an extraordinary opportunity for American students to simply live life in foreign country for a year without the pressure of graduate work. Though I have found it quite challenging to remain productive in an environment with no deadlines or bosses, this experience will certainly shape my work style and career forever.

As for the second half of my time here then, I am looking forward to developing a methodology to categorize and track universities' evolving characters. Currently I am drawing ideas from social psychology work on “brand identity” in order to develop a working typology. Also, I hope to work out a way to remain in Japan for a second year to continue research before beginning graduate school in the US—one year is simply not enough time in this fantastic country. The study of Japanese language is a lengthy and arduous process for English-speakers in particular, so I'm hoping to stay in Japan for a second year if nothing else to bring my language ability to a more functional level. Still, my time thus far in the fun and intellectual environment of RIHE has strengthened my Japanese abilities as well as fortified my desire to pursue a career in academia as a professor, and I hope to maintain professional ties with the Center for many years to come.